学生は、教師を選べるか？

「子どもは、親と教師を選べない」という言葉がある。確かに親は自然の摂理のなせる業なので、選択できるものでない。しかし、教師は、人間社会の仕組みの問題だけに検討の余地はある。

最近、大学において、学生による授業評価を取り入れる所が増えてきた。学生が、授業内容に関心、興味をもち、熱く学んでいる授業が行われているかどうかということだろうと思う。こうしたシステムを、今後取り入れる大学が増えてくることは、望ましいことと思う。

私は今回初めて、学生による授業へのアンケート調査を受けた。１１項目について４段階評価の部分と、授業の進め方への提言の自由記述部分とであった。４段階評価の部分は大学側で数的に処理し、後日報告があるようだ。　自由記述部分は、担当教官が目を通し、今後の参考にするというものである。数的処理の結果からは具体的なものを読み取り難いであろうから、自由記述が参考になるだろう。私の自由記述には、提言以外に「どの講義よりも自分の中で一番充実していました。」、「いつまでもその阿部さんでいて、たくさんの人達に話してあげて欲しい。私ももっと話をしたかった」、等々の感想もあったぐらいだから、それなりの授業ができたと思っている。

そこで、はたと気づいた。果たして学生の評価を、授業の評価と見ていいかという問題である。

私を例にすれば、確かに私は感想等から見れば、学生に応じた授業ができたかもしれない。しかし、私の授業内容が、より高度な専門知識、技術、思考を学ばさせるという大学全体の枠の中では、どうだったのかという疑問である。こうしたことを考えると、単に学生評価採用だけでは済まない、大学としての使命を含めた授業かどうかの評価は、いったい誰がするのであろうか。

一つの方策としては、その学科の他教官連中が、学生共々授業を聴講し、互いに切磋琢磨するシステムがぜひ必要なことでないかと思う。大学の先生に限らず、教師と名のつく方々は、自分の授業を他の先生方に見られ、講評、アドバイスされることを好まないということをよく耳にする。まず、こうしたところの意識改革からこそ、生徒、学生の期待する授業が成り立っていくと思うのだが、いかがなものであろうか。

（2003 年 01 月 22 日　記）